

相手の心に寄り添った

活動を目指して

「ハートフル♥エデ」は、防災・募金活動などを中心に活動し、日本赤十字社愛知県支部が直轄する青年赤十字奉仕団としても活動する名古屋学芸大学のボランティアサークル。所属するのはヒューマンケア学部生16人で、赤十字救急法などを学びながら、養護教諭を志す。「災害時や救急時、自分に何ができるか」を日々模索する学生たち。将来に役立てたいと、活動に注力する。

ボランティアに携わり11年 救急を学ぶ学生サークル

東日本大震災から約6年。復興作業は進むが、現在も13762人が応急仮設住宅(プレハブ住宅)での生活を余儀なくされており、被災地には震災の爪痕がまだまだ残る※1。震災発生後、多くのボランティアが現地で復興を支援した。名古屋学芸大学の「ハートフル♥エデ」も、被災地で活動した

団体のひとつだ。

「私たちの活動は、助けるだけが目的ではありません。しっかりと技術を身につけて、相手と心を通わせる活動がしたい。私たちが災害時にできることはほんの少し。せめて相手に寄り添いたいのです」と話すのは、名古屋学芸大学講師の石原貴代さん。「ハートフル♥エデ」を立ち上げて以来、学生とともに多くの活動に携わってきた。サークル設立は、平成18年。養護

教諭を経て、名古屋学芸大学に赴

任した石原さんが、「部活動を指導してはどうか」と提案されたのがきっかけだった。「までの養護教諭の経験を生かしたい」とボランティアサークルを結成。呼びかけに15人の学生が集まった。サークル名の由来は、フランス語の「エデ(助ける)。「心を通わせよう救護」という思いを込め、名前は「ハートの絵文字をつけた。「いざという時、動ける人になってほし

いのです。人を救うには判断力や経験が不可欠。指示を待つのではなく、自分で考えて行動できる人間になってほしいです」。すべての活動が学生主体なのは、石原さんの強い意志によるものだ。

学生主体の活動に注力し 被災地訪問で経験を積む

募金活動や防災訓練、訓練合宿、被災地訪問など活動は多岐にわたる。週1回の部会でボランティア内容や活動地域を話し合い、計画や準備を進めていく。日本

赤十字社愛知県支部の青年赤十字奉仕団として、募金や献血の呼びかけ、さまざまな救護所をサポートすることもある。

「学生たちには、状況を把握する力を身につけ、自分に何ができるかを考えてほしい。活動に集中できる環境を作るだけでなく、訪問地で学生を守るよう、私自身が知識や経験をもっと蓄えなければなりません、常に自分に言い聞かせています」

ボランティアで重要なのは事前準備だと話す石原さんは、被災状

況を調査し、活動目的を明確にすることを学生に徹底している。

昨年3月、サークルのメンバーは宮城県石巻市に足を運んだ。少しずつ復興する女川町を歩き、石巻赤十字病院で施設見学や防災講演に参加。給分浜では、メカプやワカメの加工作業を体験した。活動中は辛い現実を目の当たりにする時もあるが、地域の人々に温かく迎えられる、全員が救急や防災について改めて考えた。「ボランティアにはさまざまな形があります。自分が役に立っていると過信してはいけません。目の前の人が一歩を踏み出すお手伝いをするようにと学生に伝えています」と前を見据える。

学生からの熱い要望により、今年3月にも被災地への訪問を予定。

石原さんがデザインしたサークルTシャツ。赤十字を中心に人々の笑顔が輪になる様子には「青年赤十字奉仕団で人々がつながるように」という意図がある。背中の笑顔は「自分自身も大切にしてほしい」という石原さんの願い



1



2

1 合宿は静岡県で実施。ノルディックウォーキングで、地域の高齢者とともに災害時でも迅速に避難できる身体づくりを行う。災害食のメニュー提案もしている
2 週1回の部会では、活動内容や計画の話し合いのほか、事前調査もしっかりと行う。事前調査では石原さんが教壇に立ち、資料やビデオを用いて丁寧に説明する



ハートフル♥エデが誓う 6つのコンセプト

- 1.顔の見えるボランティアをする (face to face・相手を敬い・認める)
- 2.毅然とした態度で接する (赤十字活動の一員である)
- 3.楽しく、明るく活動する (多くのボランティア活動に参加する)
- 4.自らの身の安全を確保することに努める (二次事故の危険の回避)
- 5.常に学ぶ姿勢で、自己研鑽に努める (知識・技術の向上に努める)
- 6.常に学ぶ姿勢であること (名古屋学芸大学の学生であることを忘れない)

左から、ヒューマンケア学部2年生の柴田優花さん、鹿野文香さん、小澤佳苗さん、伊藤綾美さん、講師の石原貴代さん

(※1)参考:宮城県震災支援室ウェブサイトより



昨年3月の被災地訪問で、石巻赤十字病院から市内を眺める。2011年の震災がまちをどのように襲ったのか、学生は病院関係者からの話に耳を傾けた

となる。

「震災から時間が経ち、現地の方がどのような不安を抱えているか知りたいです。また自分が何ができるのかと課題を探そうちに、家族や命について考えました。被災地訪問は大きな経験になると思います」と話すのは、ヒューマンケア学部2年生の柴田優花さん。人の笑顔が見たいからと入部し、現在は部長を務める。ヒューマンケア学部2年生の鹿野文香さんは、「人のために何かできるなら最大限に取り組みたい。将来は養護教諭を目指しているので生徒を守る先生になりたいです」とほほ笑む。

石原さんにとって学生は「一粒の種」と話す。「大学やサークル、活動は、大地であり養分。今までの活動を生かし、いつか花を咲かせてほしい。将来につながるボランティアをしてもらうのが、何よりの願いです」と目を細める。

心を通わせ、相手に寄り添う活動を目指し、学生たちは自分に何ができるかを問い続けている。その温かな気持ちが誰かの傷をそっと癒すだろう。

活動を通して多くを学び 将来に生かせる救急を

昨年12月で3年生が引退。今後の部会や活動準備は、2年生が中心